

退公連耶麻支部会報

No.53

発行・・・支部長 矢部 宥一

発行所・・・耶麻支部広報

<巻頭言>

今年度を振り返って

支部長 矢部 宥一



会員の皆様、新しい年を迎えお変わりなくお過ごしのことと存じます。
 今年こそはコロナ禍から解放され、身も心も軽くなり、以前のように普通の生活を送りたいと心から願っているのではないのでしょうか。ウィズコロナとか言われているようですが、我々高齢者にとっては死亡者も増加しており、感染防止には特に気をつけて生活しなければならないこの頃です。

今年度の耶麻支部の退公連活動を振り返って見ますと、総会は実施できましたが、それ以後のコロナ感染が第7波、そして第8波と一気に拡大し、退公連の活動も思うようにできない状態になってしまいました。

7月に女性部の「絵手紙を描く会」で全会員に絵手紙を送付することと10月の賛助会員の募集については実施できましたが、その他の各部の行事については中止せざるを得ませんでした。社会貢献活動として取り組んでいる喜多方市少年センターの補導活動については計画通り進んで来ました。朝のあいさつ運動や祭礼行事の補導など毎月2回の活動を実施しています。担当しているのは3名ですが、高齢化が進んでいるので、来年度は若い会員から出ていただけるとありがたいです。

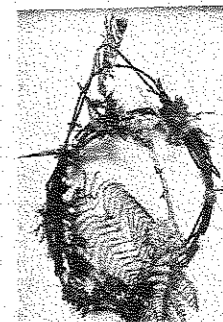
会津、県関係を見ますと、例年8月に実施していた会津連絡協議会主催による国会議員への「社会保障制度改革に関する要望活動」については、各支部からは出席せず、会津連絡協議会長が代表で議員への要望をするという形になりました。9月に予定されていた石川町の八幡屋での県大会も直前になって中止の連絡が来ました。鈴木茂郎前支部長が県大会で表彰されることになっていましたので残念です。なお県大会は隔年開催なので来年はなくて、次の年（令和6年）に福島で開催ということになります。

これらの経過を踏まえて、県大会では11月に事務局長・組織部長会議が開催されました。ここでは室井会長から「退公連活動の空洞化をいかにしていく止めるか、組織について中心に話し合う」ということが出されました。福島県退公連では平成10年に1万人を超えていた会員が令和4年には、4,800人という会員数になっています。組織の拡充と強化が課題になっています。その取り組みも、コロナ禍であることに加えて公務員の退職年齢が令和5年から61歳に引き上げられることなど勧誘活動の難しさが増加しています。

耶麻支部においても会員の減少や高齢化が目に見えており、厳しい状況が続きますが、全会員で力を出し合って退公連を支えていきたいと考えています。

すきなこと

副支部長 五十嵐 カツ子



コロナ禍で気分が暗くなりがちな毎日です。八十五歳になってから元気が出るようにと運動するようにしています。

・まず歩くこと。・近くの買物などにはリュックを背して前を向いて歩く。・退公連の会報配達は町内、御殿場公園などパトロールしながら歩く。

ところが、12月の会報配達には家族がコロナとなり、私も外出しない方がよいと考え、封書で切手を貼り「よい年をおむかえ下さい」と書いて投函しました。

2月には、歩いて配達できるようにしたいと思います。

コロナの今、よかったこともありました。まず「青つづらふじ」「藤づる」「ほうずき」「あじさい」を使ってリースを作りつけました。「リース展」を車庫と庭と玄関で開き、近くの方や友人に観ていただき、お茶を出すことはできなかったけど、お互いに楽しいひとときを過ごせました。

リースをプレゼントすると喜んでいただけたし、友人たちと塩川町の待合室に展示させていただきました。コロナが収束して、皆様とお会いできる日がはやく来ることを願っています。

2023年やってみたいこと

福祉厚生副部長 池田 満吉



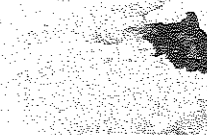
以前から実行してみたいと常々思っていたことに盆栽の「取り木」ということがある。

家の周りに「木瓜（ボケ）」の木が沢山あり、よく見ていると、下枝が地面について少し土に覆われているところから遅く根を張っているのを見かける。

木瓜の古木（こぼく）は結構枝ぶりがよく取り木に成功し、風格のある鉢に移植し開花させることができると、イメージを膨らませ「春よ来い、早く来い」の心境この頃である。

春を信じて、この冬を生きる

監事 近 輝夫



令和5年1月1日、町内会揃ってお諏訪様へ初詣、お祓いでスタート。例年大雪で泣かされている冬だが、今のところ不思議なくらい雪が少ない。

大寒が1月20日、あと10日余りで2月、節分そして立春と暦の上で春がすぐやってくる。

私は後期高齢者、今年84歳になるが「1年の計は元旦にあり」と生のオーケストラや高音質のLPレコードを聴く。温泉や旅行へも行きたい。民泊で大学生を招きたい。庭木の伐採・駐車場の融雪設備・木造板倉の改装も、やりたいことは一杯、どのくらいできるのかな？

寒く大雪の会津だがまずは春を信じ、この冬を乗り越え頑張りたい。

「心に残った古都・京都の旅」

星 勝子



去年の11月下旬、コロナ感染に気をつけながら、二人で京都の旅に出ました。観光バスを利用して朝の5時半に出発し、京都に着いたのは夕方4時でした。京都の街の賑やかさに驚きながらも、翌日から観光タクシーで名所旧跡への旅です。

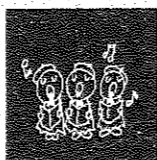
平等院鳳凰堂や宝物館、三十三間堂などを見学し、遙か遠い歴史に思いを馳せ、当時の栄華が時代絵巻のようでした。

また、六波羅密寺では数多くの見事な木像彫刻が安置されていて、その表情を拝観すると心が清められる思いでした。生きる人々の「抛りどころ」になっていることがよく分かりました。

案内のタクシーの運転手さんとも、(その運転手さん)ご自身の生い立ちまで話していただいた程、親しく話ができました。最後に運転手さんから「今日は楽しかったです。」と言われ、私も「ありがとう、お元気ですね。」と。(返しました。)こんな一期一会の出会いも旅の魅力だなあと改めて感じました。

「やっぱり昭和は輝いていた」

事務局長 青山 邦夫



年末年始のテレビ番組は、その時代の世相を反映していると言われるが、その内容が年々劣化している気がする。画面に出てくるのは、大食いやどっきり、そして笑いをとるイタズラ等が多い。年末の国民的行事と言われてきたあの歌番組も、年々、その視聴率は低下する一方だ。高齢者の世代から見ると、曲名は元より、歌手までもカタカナ、横文字ばかり。それが悪いわけではないが、約半世紀前、こたつを囲んでみかんを食べながら、家族で「私の城下町」や「せんせい」、「傷だらけのローラ」などを聴いていた時代が懐かしい。当時、「せんせい」の唄に影響を受けて教員になった私。新採用の年の「六年生を送る会」で、背広の裏地にキラキラのリボンをたくさん付けて、沢田研二の「勝手にしやがれ」を熱唱して、子どもたちを笑わせた。

あの頃子どもたちも、もう還暦を迎える年齢に近づいている。時は流れたが、昭和の思い出は、色あせない…。

「今」大事に…

事務局次長 舟城 久善



生来、身体は丈夫である。大きなけがは勿論、入院するような病気の経験は皆無である。丈夫な身体に産んで育ててくれた今は亡き両親に感謝でいっぱいである。

退職して1年目、かつてお世話になった先輩が60代半ばで亡くなった。連絡が入ったときは余りにも早すぎる死に耳を疑い、にわかに信じられなかった。とてもユニークで、親しみやすく、仕事に

ついてたくさん学ばせていただいた先輩である。

誰にでも必ず訪れる「死」、諸先輩方の訃報に接するたびに、そういう年齢に近づきつつあることを改めて考えさせられる。でも大事なことは「今を精一杯生きる」ことだと思う。そして、人生を楽しむこと、幸せを感じること…。

冬場の運動不足と健康増進を兼ねて、昨年11月からジムに通い始めた。衰えは足から始まると言われているので…。「六十の手習い」ではないが、楽しみながらマシンと格闘し、大好きなサウナでととのえ、体力維持・向上に努め、「今」を大事にしていきたい。

賛助会費について

会計主任 宮城 悠子

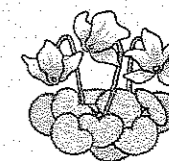
今年度も、令和4年10月の役員会に於いて、賛助会員の募集と賛助金の集約についての話し合いが行われ、割り当てられた役員の方々が各学校へ出向き、趣旨を説明し協力をお願いしました。

11月から12月にかけて趣旨に賛同された先生方の賛助会費が振り込みにて会計のもとに送られてきました。その結果は下記のようになっています。

これは長年、耶麻支部の事業として継承され、少しでも「退職公務員連盟」に関心を持っていただき本当にありがたいことと思います。有効に使わせていただきます。

今後とも、よろしくお願いいたします。

記



令和4年度 賛助会費の集計

| 項目 | 学校名 | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 合計 |
|-----|-----|--------|---------|--------|---------|
| 学校数 | | 19 | 9 | 3 | 31校 |
| 人数 | | 213 | 119 | 93 | 425人 |
| 金額 | | 54,790 | 30,697円 | 10,281 | 95,768円 |

編集後記

広報副部長 青山 邦夫

新型コロナも第8波の真っ只中、その感染がいつ収束してくるのか見通せない中、世間では形ばかりの「3年ぶりに」という文字や言葉が目立っています。どの団体でも、未だに各種活動や会合が自粛され、思うように動けない中ではありますが、そんな時だからこそ、広報の果たす役割はより大きいものと考えています。今回も、多様な視点からユニークな原稿をお寄せいただき、ありがとうございます。情報交換や今後の退公連の活動の一助にいただければと願っております。

執筆者の方々に、厚く御礼申し上げます。